

令和8年5月14日

京都府農林水産技術センター農林センター

高温及び今後の気象動向に対応した農作物の技術対策 農業技術情報（第1号）

気象庁による「1か月予報」（令和8年5月7日発表）によると、向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いとされています。特に、期間の後半は気温がかなり高くなる可能性があります。

暑さに慣れないうちに、暑熱環境下で作業を行うことが多くなりますので、こまめな水分、塩分補給や休憩を心がけ、熱中症に十分注意して作業を行うようにしてください。

また、台風シーズンは少し先ですが、近年は梅雨期に台風並みの豪雨や暴風の頻度が高まっており、農作物や施設に被害をもたらす可能性があります。

については、以下の事項を参考に、農作物の適切な管理と高温時の作業者の健康管理を呼びかけてください。

1 水稻

（1）高温対策

- （ア）田植え後の湛水条件で高温が続いた場合に、稲わら等有機物の急激な分解に伴って硫化水素等の「ガス湧き」が発生し、根が障害を受けて生育が停滞することがある。葉色が薄く、分けつ増加が緩慢で、田に足を踏み入れた際にブクブクと気泡が認められるような場合は、2～3日程度落水して根に酸素を供給する。
- （イ）苗が順調に活着し、高温傾向で推移した場合には、稲の生育が旺盛となり、過剰分けつや籾数過多を招き、乳白粒等を増加させる事例が見られることから、中干しの徹底等により茎数・籾数の適正化に努める。

（2）豪雨、暴風や台風通過前

- （ア）排水路、ほ場内の排水溝等の点検及び補修整備を行う。稲体が風の影響をなるべく受けないように深水湛水する。

（3）豪雨、暴風や台風通過後

- （ア）台風通過後は、排水路の浮遊物や泥を除去し、速やかな排水に努め、できるだけ葉を水面に出すようする。間断かん水を行い、生育の回復を図る。
- （イ）水田冠水後に黄化萎縮病の発生が懸念されるが、対象薬剤が1剤で収穫90日前までのため、常発地では栽培初期の薬剤散布を検討する。

2 豆類

(1) 豪雨、暴風や台風通過前

- (ア) 作付前から、排水溝や明きよの設置とそれらの排水口への連結を確実にを行いほ場内の過剰な水分の排出を促す。
- (イ) 浸水、冠水の被害を減らすために、作付中も排水口や明きよの点検を行うことにより、普段から速やかなほ場排水に努め、土壌の乾燥を促す。

(2) 豪雨、暴風や台風通過後

- (ア) 帯水している場合は、水が引いた後、病害の発生を防ぐため、殺菌剤による防除を行う。
- (イ) 生育初期に湿害を受けた場合は、湿害の程度に応じて再播種を行い、被害の軽減に努める。なお、晩播は生育量が低下するので、播種量を増やすなどの対策により、生育量の確保に努める。

3 野菜

(1) 高温対策

- (ア) かん水は、立地条件や品目、生育状態を十分考慮し、早朝または夕方に実施する。
- (イ) 地温上昇の抑制や土壌水分保持のため、マルチや敷き藁などを活用する。
- (ウ) 施設栽培では側窓換気に加えて妻面開放や遮光資材等の使用により、施設内の温度上昇を抑制する。

(2) 豪雨、暴風や台風通過前

- (ア) ハウス栽培では、ハウス内に風が吹き込まないように、被覆資材破損部を補強し、しっかりと閉めきる。また、資材固定金具やハウスバンドが緩んでいないか点検して締め直し、サイドが風であおられないよう固定する。
- (イ) 露地栽培では支柱やフラワーネットを点検して補強し、しっかりと固定する。直播きでまだ生育初期の場合は、べたがけ資材等で茎葉を押さえる。その際、べたがけ資材は風にあおられないようにしっかりと固定する。また、ほ場が冠水しないよう、排水路を整備する。

(3) 豪雨、暴風や台風通過後

- (ア) 滞水している場合は、速やかにほ場の排水に努める。
- (イ) 風雨による傷から病原菌が侵入し、病害の発生が予想されるため、こまめに観察し、発生初期に防除を行う。
- (ウ) 収穫可能なものは速やかに収穫する。播種直後で発芽不良の場合は、直ちに播き直しを行う。

4 茶

(1) 高温少雨対策

- (ア) 干ばつ害を軽減するため、うね間や株元の敷草等により、土壌水分の保持に努める。特に幼木園は根圏が浅く、地表面温度が高まった際に高温及び干ばつの被害を受けやすいため、注意する。
- (イ) 5mm以上の降雨が無い日が10日以上続き、うね間を掘っても土壌が乾燥している状態であって、かん水設備がある場合は、夏季、気温の下がる夕方頃にかん水チューブ等でかん水を行い、土壌水分を保持することで樹勢の維持に努める。
- (ウ) 被覆施設のあるところでは、寒冷紗（遮光率 60～70%）、よしず等を筋掛けする。二段の棚の場合は、上段を広げる。被覆することにより、露天に比べて株面付近の温度が3～7℃低下し、葉焼けを軽減することができる。被覆期間中が長期にわたる場合、樹勢が低下し落葉等の症状が発生する場合があるため、被覆期間は9月中旬頃までを限度とし、気温が平年並に下がった曇りの日に被覆を除去する。
- (エ) 気温が高い時期にはカンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマなどの害虫の被害が大きくなりやすいため、発生初期に、的確に防除する。

(2) 豪雨、暴風や台風通過前

- (ア) 新植、幼木茶園は、風害を受けやすいので、株元に土寄せを行う。特に、風当たりの強い箇所では、支柱等に茶樹を結束する。
- (イ) 傾斜地茶園では、浸食防止のため土壌表面のマルチや周辺排水溝の整備を行う。
また、新しく造成した茶園では、降雨量が多いと土壌浸食の恐れがあるため、排水路を整備する。
- (ウ) 被覆棚では、ほどけた被覆資材が強風を受けて倒壊する恐れがあるため、被覆資材が支柱等へ確実に結束できているかを確認する。
- (エ) 挿し木床では、トンネルのビニールが強風で飛ばされないよう、杭や紐などで固定するとともに、日よけの被覆資材を開けて、支柱等に結束する。
- (オ) 製茶工場では、雨水が浸入しないように十分に点検する。

(3) 豪雨、暴風や台風通過後

- (ア) 茶園が浸水した場合は、速やかに排水を図るとともに、漂着物を除去する。
- (イ) 強風で株元が緩んだ幼木園では土寄せを行い、地際部や根を保護するために敷草等を行う。
- (ウ) 土砂が流入した場合は速やかに取り除く、また、表土が流亡している場合は早急に土入れを行う。
- (エ) 挿し木床の被覆を台風前に解除している場合は、日光がさす前に被覆して日焼けを防止する。

- (オ) 製茶工場が浸水した後に、機械類に通電を再開する場合には、十分乾燥させた後、使用マニュアル等により手順や注意事項を確認するとともに、漏電やショートに留意した対応を行うこと。また、状況によってはメーカーによる点検を受けるとともに、ヘルメット等を着用して複数で作業をするなど、安全を確保する。

4 果樹

(1) 高温対策

- (ア) かん水は、早めから計画的に行う。スプリンクラーや散水チューブを使用して、成木園では20mm(20t/10a)かん水する。無降雨が7日以上続く場合は、繰り返しかん水する。水量を節約するには、早朝か夕方にかん水する。
- (イ) 雑草との水分の競合を避けるため、園内の草を刈り取り、その草を用いて株元にマルチを行う。
- (ウ) 園内をよく観察し、ハダニ類・カメムシ類の防除を行う。なお、間もなく収穫を迎える品目では、農薬の「収穫前日数」に十分注意する。

(2) 豪雨、暴風や台風通過前

- (ア) 園内の排水対策を徹底する。
- (イ) 防風ネットは、柱の倒壊を防ぐため、控え線や杭を打って補強する。また、ネットの破れ目を補修しておく。
- (ウ) 果樹棚は、周囲線の留め金、アンカーからの控え線、吊り線を点検し、切れないように補強しておく。また、棚の揺れ止め補強を行っておく。ハウス(雨よけ含む)では、被覆が破れないように、押さえバンドで補強するとともに、ハウスごと飛ばないように、柱から控え線を張って補強しておく。
- (エ) 徒長枝等はできるだけ整理して風通しを良くしておく。

(3) 豪雨、暴風や台風通過後

- (ア) 骨格枝が完全に折れた場合は、鋸等で折れ口をなめらかに切り戻して、癒合剤を塗布する。不完全な場合は固定し、癒合面が乾燥しないようにビニール等で覆う。
- (イ) 冠水した場合は、速やかな排水に努める。
- (ウ) ブドウではベと病、ナシでは黒星病や黒斑病、モモではせん孔細菌病、カキでは炭疽病等の発生が予想されるので、殺菌剤を散布する。